

子どもの生活環境と遊び ——第一報 不登校児とテレビゲーム——

(分担研究：学習・遊びと子どもの健康に関する研究)

南部春生* 太田八千雄* 沢田博行* 服部哲夫*
岡嶋 覚* 須藤 章*

要約：生活環境とは親子、人間関係によってもたらされる精神的因子と家庭内外の森羅万象による物理的因子の両者が絡み合って構成されるものであり、子どもにとってはその全てが遊びの対象であり、学習の師である。

不登校児の多くは家庭にあってTV、TVゲームなどの遊びに熱中し、生活リズムは著しく乱れている。基本的な対応は親、周囲の人達が優しく受容することに尽きるが、1. TVゲームなど子どもが選択した遊びを常に許容し、2. 親が積極的に遊びを共にすることで、子どもの早い立ち直りが期待される。

見出し語：生活環境、遊び、不登校児、TVゲーム、生活リズム

研究目的：不登校児への基本的な対応は親や周囲の人達が児を優しく受容することに尽きる。児の生活リズムは極端に変調し、覚醒時間の殆んどをTVゲームなどの遊びに費している。これらの遊びを親が常に許容し、積極的に参加することが子どもの健康を回復し、生活リズムにどのように影響するかを知ることを目的とした。

研究方法：1. 生活環境は親子、人間関係による精神的因子と子どもの周囲を占める物理的因子の両者が絡み合って構成されるが、ここでは父母の子どもへの態度と母親の職業の有無を検

討した。2. 遊びとは子どもが熱中している全てについていうが、積極的に参加するということは子どもの遊びを見、共に遊び、習う気持で関わることであり、母と父の両者がどの程度に関わっているかを今度の研究では数量化して検討していない。

3. この度の検討対象は平成2年、3年の2年間に天使病院小児科カウンセリング外来を受診した73例（男児37例、女児36例）である。

4. 昭和56年から平成元年の10年間に受診した心に悩みをもつ子どもへの対応を目下の状態を優しく受容し、遊びの全てを許容することでど

*札幌天使病院小児科 (Dept. Pediatrics, Sapporo Tenshi Hospital, HOKKAIDO)

のように健康が回復し、生活リズムへ影響したかを検討した。

結果：1. 10年間にカウンセリング外来を受診した患児は2363例で、これは外来新患数の7.5%を占め、不登校児は304例(12.9%)であった。

2. 親が不登校児を開き直って優しく受容するには3-6カ月を必要とするが、その積極的な遊び参加には程度の差があり、それがそのまゝ児の立ち直りと関係し、回復に要する時間は3カ月から3年以上に亘る。

3. この場合、児の健康回復は「社会生活を思いやりとたくましさで生きる」力を身につけることを目的とし、学習に集中することは第2の目的とし親、教師、医師間で相互理解するよう努力を重ねる。

4. 子どもを優しく受容し、遊びを許容するためには、目下の生活リズムを認めて関わることにはじまる。不自然と思える子どもの行動に合わせるといことは子どもの意識水準をよく理解して関わることであり、至難な事である(図1)。

5. 平成2年、3年の不登校児の親子関係(表1)、年齢別には3-5歳、6-9歳、10-14歳、15歳以上に分けたが、男女児を含め母子家庭は5例(6.8%)であった。また子どもの申告によると、1) 父親は優しいは30例(41.0%)、母親は5例と少く、きびし過ぎるとするものは64例(87.6%)ときわめて多かった。

2) 母親の就業は56例(76.7%)と高率で、無職で家庭にあっても、以前から体調が悪く子どもとは殆んど遊んであげられない母親が3例あった。

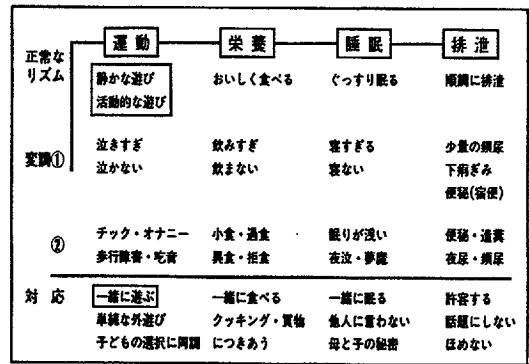


図1. 生活リズムの変調と対応努力(意識水準に合わせて)⁶⁾

表1 不登校児と親子関係・天使病院 1991-1992年 (男児37名, 女児36名)

性	年齢	NO.	同胞の数				母子	父の態度		母の態度と職業						
			1	2	3	4		や	無	や	が	有	自	無		
男	3-5	3	2	1			1	1	1	2	1	1				
	6-9	10		3	4	1	1	2	1	5	9	1	6	1	3	
	10-14	17	4	9	4			5	9	3	1	15	1	10	2	5
	> 15	7	2	4	1			4	3		2	5		6		1
女	3-5	4	2	2		1	3	1		4	2	2				
	6-9	8	2	4	1	1		5	3	2	6	4	2	2		
	10-14	18	2	13	2	1	3	7	8	1	17	14	1	(3)		
	> 15	6		4	2			3	3		6		5	1		

や: やさしい, き: きびしい, 無: 無関心, が: がまん

表2 不登校児の主症状と生活環境(遊び)

性	年齢	NO.	自 律	不 安	親 痛	やせ 肥満	やせ 肥満	やせ 肥満	やせ 肥満	やせ 肥満	やせ 肥満	遊 び						
												TV	TG	他	外			
男	3-5	3			1					1	1	1	1	1				
	6-9	10			(有病)	1	3	1	1	1	1	3	1	7	1	4		
	10-14	17			(有病)	3	1	3	1	1		1	(遊)	1	8	3	1	5
	> 15	7				1	1	1			1	2	1	(遊)	2	2		
女	3-5	4			1	1	1							2	2			
	6-9	8			2	2		1		2	1	2	1	3				
	10-14	18			2	8	1	1	1	4	2	3	1	10	3	1		
	> 15	6			1	1	1	1	1	1	1	1	2	(遊)	1	2	1	

TV: テレビ, TG: テレビゲーム, 他: マンガ本など, 外: 外遊び, 遊: 遊戯行為

6. 不登校前の主症状と初診時の遊び(表2)

1) 不登校前の主症状は多岐に亘るが、腹痛、自律神経不安症状が多く、無症状のままに不登校した児は10例(13.2%)に認められた。

2) 初診時の生活、特に熱中している遊びは、ぼんやりとTVを見るのが10例、TVゲームは男児が19例(51.4%)、女児は4例(11.1%)と両者に差異が認められた。女児の多く(15例、41.7%)はマンガ読書に熱中し、音楽鑑賞、食事を作ることを楽しんでいた。また外遊びの殆んどは一人遊びを早朝、夜半に行い、万引、非行、帰宅が深夜等の逸脱行為を示していた。

7. 症例供覧

1) C Y、12歳、男児(図2)

図中(O)は母のみ、(●)は父母でカウンセリングを受けたことを意味している。この児の場合は殆んどが母の優しい関わりの末に、修学旅行、登校再開、部活へと進んだが、遊びへの積極参加はアニメーションを見ている時に、恐怖の場面で母に助けを求めたことに始まる。子どもは母の優しい支援を継続的に受け、その後は次第に精神状態が安定し、明るく快活な学校生活を遊び中心に過している。

2) H Y、12歳、男児(図3)

頑固なスパルタ父親とそれに従順な母親が優しく受容し、TVゲームを中心に種々の遊びを子どもと共有し、2年6ヵ月後には母親の優しさに対して誕生日の花束で報い、父親の変容の確認を重ね登校を再開した。TVゲームは父親を徹底して打ち負かしていたが、父親がこれを容認するのに多くの時間を要した。

図2. C.Y 12j ♂ 平成2年7月~平成5年1月

C.C 不明熱、不登校

父：頑固できびしい。母：まじしい一方的。

父と母の関係：不安定で父は母に甘える。

本人：一人っ子、まじめ、友達少ない。

平成4年1月30日(1年半)で登校する。

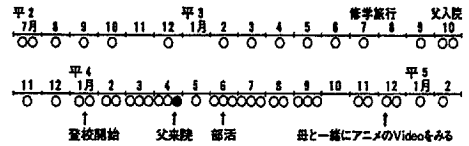


図3. H.Y 12j ♂ 平成1年7月~平成5年1月

C.C 過換気症候群、不登校

父：頑固、スパルター的。母：従順、口うるさい。

弟：本人の意志に従う、ケンカしない。

本人：まじめ、成績優秀、なんでもこなす。

平成4年4月(2年8ヵ月)で登校する。

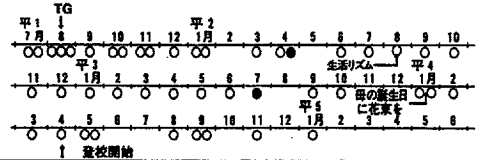


表3 K.Y 9j ♀ 平成3年3月~平成5年1月

C.C. 手のかからない子、不登校

父：7才の時に別離

母：口うるさく一方的、働いたが辞める。

長兄：緊張不安、次男：のびのび育つ、

本人：あまり構ってもらえない

スモウ、一輪車、外遊び、買物一人で、TG、TV、マンガ本、チェス、花札、将棋で興奮し、絵を画くことが大好き。

ハムスターと遊ぶのが好き、母は付き合う(?)

長兄、次兄も不登校、時々登校しまた休む

3) KY、9歳、女兒(表3)

母子家庭で2人の兄も不登校している。末っ子の本人は幼少時から両親に構ってもらえず、兄の遊びの後をついて動いていた。これで学んだ多彩な遊びをひたすら繰り返し、外遊びと内遊びのいずれにも熱中し、興奮もするが、母親の関わりは少く、なお一人遊びのまま、登校には到っていない。

4) KK、14歳、男児(表4)

マンガ本、TVゲームに熱中し、目に悪い、勉強が遅れると親に云われても反発してこれを行っているが、これを見て、ゆっくり関わり、もっと一緒に遊ぶことをしてもらおう。子どもはゲームに飽き、新しい品を求めた時は自分の金を費うように指示し、やがて外遊び、アルバムで幼少時を回想し、次から次へと活動的な動きを見せ、生活リズムが正常化した。

考察：不登校児を代表に、心に悩みをもつ子どもは自己主張を円滑に発揮することが出来ず、むしろ親、大人には手のかからない、良い子、成績もよく評価されていることが多く、心の悩みの身体症状、問題行動の理解に苦しむ。人間は自分の意志をはっきり言葉で表現することによって社会生活を営めることから、これを上手に表現せしめるには、目下の状態を優しく受容し、親、大人の変容が子どもの健康、生活リズムを正常に復帰させることになる(表5)。そのためには家庭に籠り、ぶらぶらして所在のない子どもが、自分で選択した遊びを常に許容し、共に楽しく関わり、父母が共調して関わることはその効果を早めることに直結する。子どもは

表4 K.K 14j ♂ 平成3年5月～平成4年3月

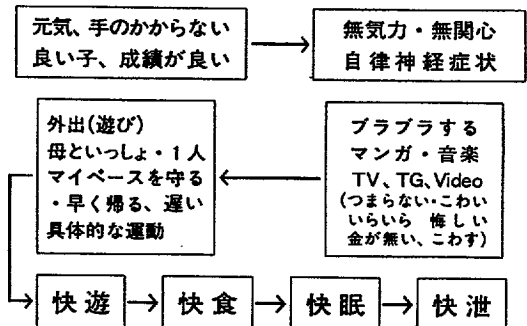
- マンガ本・TG：新しいものを買いたがる目に悪い、自分の金で買わず勉強が遅れる<see, wait, & together.> 欲求不満(甘える, わがまま, コトバ汚い, 乱)
- カラオケ(家族といっしょ)→バスケット→小さい時の回想(アルバムを見る)→マイペースで外出→兄弟でTG売り買い→早朝マラソンを始める→昼夜生活正常化→国語の勉強(漢字)→進研ゼミ開始

表5 自己主張(欲求不満の表出)

自分の意思を言動で表現する
 自分の意思を行動で表現する
 甘える・わがままを言う・
 汚い言葉を出す・乱暴する

緘黙状態となる、一人で行動
 心の悩みを身体症状で表出する

表6 生活リズム回復までの道程



親をして、様々な苦しみ、注文をつけながら、やがて外に向けて活動的に動き出し、外→内、内→外の生活を親と共に、さらには自分一人で展開しながら、やがて健康的な生活リズムである快遊→快食→快眠→快池の世界を享受し、健康を回復し社会復帰する(表6)。

ここに到るには3カ月～3年以上と症例によって回復時間は異り、それは親の遊び参加の程度に強く関係するが、この度の報告ではその数量的検討は行わなかった。今後の検討課題とし、次回に報告する。

また不登校児に限らず、例えば食事の問題行動であるヤセと肥満、排泄の問題、症状である夜尿、頻尿、遺糞・遺尿、さらには繰り返す慢性疾患である喘息、アトピー性皮膚炎、自家中毒症などについても同様の検討をする予定であ

る。その上でたとえ遊びではあっても緊張している時、気楽に展開している時の脈拍、呼吸、緊張度の検査を通して子どもの心の形成、体力の回復などを科学的に証明し、遊びが心に悩みをもつ子どもに良好な影響を及ぼし、健康の回復に役立つことを立証したい。

文 献

- 1) 南部春生：幼児の心の問題——幼児後半を中心に——，小児科MOOK，No.60，子どもの心の問題，17～29，金原出版，東京，1991年。
- 2) 山下文雄他：外来で診る小・中学生の心の問題，同上，30～39，1991年。
- 3) 南部春生：泣いてこまる子，手のかかる子との対応と適切な生活指導，周産期医学，19：104～108，1989。

Abstract

Study on Children's Life Environment and Plays

1st Report : School Refusal Children and Their TV Games

Haruo Nambu, Yachio Ohta, Hiroyuki Sawada, Tetsuo Hattori,
Satoshi Okajima and Akira Sudo

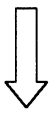
Children's life environment is composed of an entanglement of mental factors in parent-child and human relationships and physical factors in all things in nature inside and outside the family, all of which is, for children, both the object of play and the master of learning.

School refusal children are often enthusiastic about plays such as TV, TV games at their remarkably disturbed living rhythms. The fundamental answer to such a difficulty is, in a word, acceptance of them by their parents and surrounding persons. In this connection, their early recovery therefrom was thought expectative through 1) willing acceptance of plays of their choice, such as TV games and 2) playing with them as positively as possible.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:生活環境とは親子、人間関係によってもたらされる精神的因子と家庭内外の森羅万象による物理的因子の両者が絡み合って構成されるものであり、子どもにとってはその全てが遊びの対象であり、学習の師である。

不登校児の多くは家庭にあって TV、TV ゲームなどの遊びに熱中し、生活リズムは著しく乱れている。基本的な対応は親、周囲の人達が優しく受容することに尽きるが、1,TV ゲームなど子どもが選択した遊びを常に許容し、2.親が積極的に遊びを共にすることで、子どもの早い立ち直りが期待される。